

櫻井義秀編著

# 現代中国の宗教変動と アジアのキリスト教

現代宗教文化研究叢書7／北海道大学出版会／2017年3月／490頁／7500円＋税



松谷暉介

近年、中国宗教に関しては『現代中国の宗教——信仰と社会をめぐる民族誌』（川口幸大・瀬川昌久編、昭和堂、二〇一三年）、中国キリスト教に関しては『はじめての中国キリスト教史』（石川照子・桐藤薫・倉田明子・松谷暉介・渡辺祐子共著、かんよう出版社、二〇一六年）、東アジアや東南アジアのキリスト教に関しては『東アジア・キリスト教の現在』（芦名定道著、三恵社、二〇一八年）や『東南アジアのキリスト教』（寺田勇文、めこん、二〇〇二年）などの諸研究が見られるようになった。しかし本書は、「現代中国の宗教」と「アジアのキリスト教」という二つの巨大なテーマを一冊の学術書として編集し、中国のみならずアジア（特に北東アジアと東南アジア）における諸宗教の多様性とキリスト教の躍動性を浮き彫りにしようという、壮大なスケールの研究書である。これだけ大きな研究プロジェクトを支えたのは、若手からベテランまで幅のある二十人以上の優れた研究者たちの共同執筆・共同研究であることは間違いない。

いが、何よりも、中国の諸宗教とアジア各地のキリスト教に対する幅の広い関心と目配りを持ちつつ本書の編集に当たられた櫻井義秀教授の高い見識と熱意によるものであると言えよう。

評者自身は「中国のキリスト教」を専門研究分野としているだけであり、キリスト教以外の中国の諸宗教や中国以外のアジア諸地域のキリスト教について詳しいわけではないが、本書の構成、特徴、課題を評者なりにまとめて、以下に紹介したい。

## 本書の構成

まず、本書は二〇本の論文が三部構成に分けて収録されている。

### 第一部 現代東アジアの社会と宗教

#### 第一章 現代東アジアの宗教

#### 第二章 東アジアの福祉と家族

#### 第三章 中国における計量的宗教社会学とその課題

### 第二部 アジアのキリスト教

#### 第四章 アジアのキリスト教会――

日本、韓国、中国、タイ、モンゴルの比較調査

#### 第五章 本国と日本における韓国カトリック教会と信者たち

#### 第六章 社会参加する中国の家庭教会

#### 第七章 朝鮮族キリスト教の実態について

#### 第八章 台湾の政教関係にとつての台湾語教会という存在

#### 第九章 香港におけるキリスト教と社会福祉――その過去、現在、未来

#### 第十章 ポスト社会主義時代のモンゴルにおけるキリスト教

#### 第十一章 現代タイにおけるカトリック・キリスト教会の実態と社会活動

### 第三部 中国の宗教復興

#### 第十二章 中国に見る多神教世界の社会ダイナミズムと可能性

#### 第十三章 明暗を分けたチベット仏教の高僧

#### 第十四章 雲南保山回族にとつての国家

#### 第十五章 愛国的宗教指導者の悲哀――二〇一三年新疆ウイグル自治

#### 区イスラーム調査

#### 第十六章 五台山の寺院復興と聖地観光

#### 第十七章 西安市の仏教寺院と信徒活動

#### 第十八章 北京市の道教と道観

#### 第十九章 雲南省・江蘇省・甘肅省における宗教団体の社会活動

#### 第二十章 インド、ラダックにおける仏教ナシヨナリズムの始まり

以上のように、大枠としては三部構成となっており、第一部で「現代東アジアの社会と宗教」が総論的に論じられ、第二部で「アジアのキリスト教」として日本、韓国、中国、台湾、香港、モンゴル、タイの各地域のキリスト教が紹介され、そして第三部では「中国の宗教復興」と題して、中国大陸におけるチベット仏教、イスラーム、仏教、道教などについてケース・スタディーがなされている。

## 本書の特徴

本書の内容は多岐にわたる膨大なものであり、また本書評の紙幅も限られるため、以下では個人的に着目したいいくつかの点を述べることで、本書の特徴の紹介としたい。

第一部「現代東アジアの社会と宗教」では、第二部以降の諸論文を読み解くうえで基本となる研究視点がまとめられている。第一章「現代東アジアの宗教」では、東アジア宗教を見るためには「政教関係と公共空間」「世俗化と宗教復興」「グローバル化と不安定化社会」「宗教統制と社会参加型宗教」など多面的な視点の必要性が指摘されている。特に第三節では、東アジアにおいては儒教・仏教・道教が集合して民俗信仰となっている「基層信仰」の持続性が強い点、古代から近代まで基本的には政治優位の政教関係であった点など、東アジア宗教の特徴を端的に解説・分析している。同章の冒頭では、「政教関係だけ取り上げても東アジアの諸国はそれぞれに独特であり、

政治的統制の有無によって宗教制度や団体が関与する公共空間もスペースの位相や領域の大きさがおおいに変わる」と指摘されているが、同章末尾では、特に中国の現代宗教に関しては、今後は「公共空間における宗教の位置に注視して社会的研究が進展されるべき」と、本書全体における主要な研究視座が提示されている。

第二章「東アジアの福祉と家族」では、日本・韓国・台湾・中国の社会福祉制度の変遷の概要を紹介しているだけで、宗教については触れられていないが、本書の「はじめに」において「宗教運動がどのような形で生じるかについては、当該社会における政教関係や経済発展の段階、および社会福祉の成熟度もおおいに関わってくる」と指摘されているように、社会福祉の未成熟を宗教が補っているケースがあることを予測・論証するための基本情報・データを提供している。

第三章「中国における計量的宗教社会学とその課題」では、近年、中国におい

てなされるようになってきた大型調査データを用いた分析手法・結果を紹介している。こうした統計データを用いた宗教調査によって、(1)宗教状況の動態、(2)宗教性の規定要因、(3)民間信仰の類型化、(4)僧侶の宗教心理、(5)宗教と精神的健康、(6)宗教と信頼、(7)宗教とその他の社会的態度、などの知見を得ることができ、こうした計量的知見を蓄積していくことで、他の地域との比較研究が可能となることを指摘している。

評者自身の研究方法はどちらかといえば歴史研究であり、現代の中国キリスト教を研究する際にも、基本的には歴史文献史料の収集・分析を主とし、歴史的背景から論じる手法をとっているため、本書で紹介されている社会学的研究手法にはあまり関心を払ってこなかった。それだけに、本書のような統計数値やインタビューなどの社会調査を基盤として中国の宗教やアジアのキリスト教を分析した研究報告は、歴史研究的視点からでは見えてこない分析視点を与えてくれる点で、評者にとって示唆に富むものだった。

た。特に、第三章で紹介されている近年ようやく利用可能になってきた計量的統計を活用する宗教研究は、今後、広大な中国を研究する際に多くの貴重なデータを提供してくれることだろう。

第二部「アジアのキリスト教」の六、九章は、いわゆる「兩岸三地」と呼ばれる中国大陸、台湾、香港という異なる社会的コンテクストにおいて、政教関係や社会福祉制度の相違が実際のキリスト教の社会的形態にどのように違つて現れるのかを比較的視点で概観するうえで、非常に分かりやすく興味深かった。また中国大陸のキリスト教に関しては、社会的に周辺存在である家庭教会と朝鮮族教会に着目することで、中国キリスト教の中でもこれまであまり着目されてこなかった側面に光を当てている。敢えて欲を言えば、キリスト教の公認教会である三自会（三自愛国教会）について論じる章がもう一つあれば、コントラストがよりはっきりできて良かったのではないかと思う。

あった。

十章では、旧社会主義国家であったモンゴルにおける近年の宗教復興、特にキリスト教の概況、そして十一章では伝統宗教である仏教が根付いているタイにおけるキリスト教の状況が紹介されている。モンゴルにおけるキリスト教人口は約二%、タイにおけるキリスト教人口は一%程度と両地域とも共通してキリスト教は圧倒的に少数派である。しかし両者を比較してみると、前者は長年にわたる社会主義によつて伝統宗教が抑制・縮小させられたところからの宗教復興とキリスト教の急増であり、後者は近代化を経てもなお仏教国であり続けている社会の中でキリスト教の微増であるなど、対照的な歴史的・社会的コンテクストの中で少数派キリスト教の状況に関する知見を得ることができる。中国キリスト教を主たる研究対象としている評者にとつて、第二部の各章によつて東アジアのキリスト教を改めて意識することができ、中国キリスト教の特質やコンテクストを改めて考察するための比較分析の視点が与えられたことは、極めて有益で

第三部「中国の宗教復興」では、冒頭に位置付けられている十二章「中国に見る多神教世界の社会ダイナミズムと可能性」において、中国・東アジアの価値観・世界観の特質は「①主体性を考慮せず、担い手のそのものが相互転換・相互流動、②不断に新たな事物を創り出す、③万物流転、偶然性重視」であり、また「両義的・流動的な価値意識の根深さ、力強さ」であり、つまりは「単一価値体系」とは本来的には相いれないものであることが指摘されている。そして「毛沢東主義・中国共産党思想」は「西洋の衝撃」に相對するため形成された「単一価値体系」であるという主張は、「毛沢東主義・中国共産党思想」はあくまで一時的なものであり、本来的な中国・東アジアの価値観・世界観ではないということとを意味している。この章が第三部「中国の宗教復興」の冒頭に位置付けられていることで、中国共産党の厳しい宗教統制という「単一価値体系」の押し付けの

中でも宗教復興がみられるのは、実は中国の本来的価値観・世界観が両義的・流動的なものであり、単一的なものを拒絶するものである、ということが暗に示唆されている。

第三部の他の章、特に十三、十五章にかけてのチベット仏教やイスラームについての論文を通して、単一価値体系を押し付ける厳しい宗教統制が確かに依然として存在していることを再認識させられるが、しかし同時にその中であつて絶えずさまざまな抵抗・対抗があることも紹介されており、けつして「単一価値」が浸透しているわけではないことが描かれている。そして十六章以下の論考でも、中国の市民の精神的安定や居場所として仏教や道教が大きく寄与していることが指摘されており、中国社会全体が多様な宗教的価値観・世界観を求めていることが見て取れる。

### 本書の課題

本書は二十数名の著者たちによる論文集であるため、一冊の研究書として編集

した場合に生じるいくつかの課題があることも否めない。第一は、所収されている諸論文の濃密度・精緻度の差である。中には、一つの論文として完成度の高いものもあれば、研究ノートのなレポート

まで、内容や構成の濃密度・精緻度にかなりの差があるように見受けられた。もつとも、それだけ中国やアジアの宗教が多様であり、言語的問題や調査制限の問題なども含めて、共通の水準、視点、方法で論じることの困難さの表れとも言えなくもない。

第二の課題は、用語・字体の統一の問題である。評者自身、キリスト教研究を専門としているため、特にキリスト教関連の用語に関して気になった点がいくつか見られた。例えば、「三自会」「三自愛国教会」「三自愛国運動」「中国基督教三自愛国運動委員会」は基本的に同一のものを指すが、用語を統一するか、もし敢えて区別するならばその補足説明があつてほしい。また「ケープタウン決意表明」(二四九頁)と「ケープタウン公約」(二二二頁)は、いずれも「The Cape

Town Commitment」を指すはずであり、やはり用語統一の必要がある。そのほか、「ローマ教皇」と「ローマ法王」の混在、中国のカトリック教会を表す漢字表記の「天主教」と「中国カトリック」の混在、また簡体字・繁体字表記の混在が散見される。また著名な宗教社会学者「楊鳳崗」を「楊風崗」(二五六頁)と誤記しており、別人物であるかのような誤解を与える箇所も見受けられた。

第三の課題は、巻末索引である。これは第二の用語統一の課題とも連動するが、同一の事項が別事項であるかのように索引に列記されているものが多数ある。また複数ページに記載がある事項が、一ページ分しか記載されていないものが多数ある。さらには評者から見て重要と思われる本文に登場する事項(人名)がいくつか索引から抜け落ちている(例えば「呉耀宗」「丁光訓」「楊鳳崗」など)。特に第二の課題である重要な用語の統一、第三の課題である巻末索引の作成は、学術書においては極めて重要である」と評者は考える。将来、もし再版・増刷

の可能性がある場合、あるいは類似の研究書の出版がなされる場合には改善の余地が大いであろう。

### 本書の推薦

最後にいくつかの課題を指摘したが、しかしそれは本書全体の価値を損ねるものではなくない。むしろ、本書は今後の中国をはじめとする東アジアの宗教・キリスト教を研究する上での重要な指標となる研究書であるといっても過言ではない。専門分野が細分化している昨今、特に評者のように自分の専門分野・研究方法にだけ関心が偏りがちになってしまう者にとっては、本書のように学問的視野を大きく広げてくれる研究書は必読である。中国研究の諸分野の研究者はもちろんのこと、他の地域研究や他の宗教研究をしている研究者の方々に、本書の購入・精読を是非お勧めしたい。